

Title	言語社会化の過程 : 親子3人の会話における謝罪表現を中心に
Author(s)	バーデルスキー, マシュー
Citation	阪大日本語研究. 2014, 26, p. 33-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50084
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

言語社会化の過程

—親子3人の会話における謝罪表現を中心に—

Language socialization: Apology expressions in caregiver-child triadic interaction

マシュー・バーデルスキー

BURDELSKI Matthew

キーワード: 親子の会話、参与枠組み、消極的ポライトネス、言語社会化 (language socialization)、謝罪表現

要旨

本稿は、日本人親子3人の会話における謝罪表現の実践を質的に分析する。特に親が謝罪表現をどのような場面で、どのように使用し、教えるのか、そして謝罪表現は言語社会化の過程においてどのような役割を果たすのかという問題を探ってみる。本研究のデータは、養育者—子供間相互行為研究グループのコーパスを用いる。結果は、幼児が兄妹(弟妹)やその環境にある有性物などになんらかの危害を加えた時、主に第三者である兄姉(弟妹)や有性物などに「ごめんなさい」または「ごめんね」という謝罪表現を代弁したり、^{プロンプティング}促したりするという2つの社会化ストラテジーを使用する。そして、幼児が謝罪表現を習得すると同時に、責任、モラルティ、アイデンティティ、思いやりなどといった文化的要素も身につけることを示唆する。

1. はじめに

近年、謝罪という発話行為は、社会学、心理学、哲学などの様々な分野で注目されてきている。言語学においても謝罪表現の研究が増えてきた。しかし、これまでの研究は主に、成人を対象とした質問紙調査 (Blum-Kulka & Olshtain 1984; Nureddeen 2008 など)、または会話 (Holmes 1990; Robinson 2004 など)にみられる謝罪表現に焦点が当てられてきた。他方、親子間の会話における謝罪表現に関する研究は少ない (Burdelski 2013; Ely & Gleason 2006 など)。謝罪表現は、子どもの言語発達、モラルの習得や社会化において重要な役割を果たすと考えられる。そこで、本稿では親子3人の会話における謝罪表現の実践とその社会的役割に着目する。

本稿では、まず2節で言語社会化論を概観し、謝罪表現に関する先行研究について述べる。3節で収録したデータ及び方法論を一通り説明する。4節で親子3人の会話における「ごめんなさい」と「ごめんね」という頻繁に使用される謝罪表現の分析を行い、親が子

どもにそれらの謝罪表現をどのような場面で、どのように使用し、教えるのか、そして、謝罪表現は日本語の言語社会化のプロセスにおいてどのような役割を果たすのかを明らかにする。さらに、幼児が謝罪表現を習得するのと同時に、責任、モラリティ、アイデンティティ、思いやりなどといった文化的要素も身につけることにも言及する。最後に 5 節で本研究の結果をまとめ、今後の課題を考察する。

2. 先行研究

2.1. 言語社会化論

「言語社会化論 (Language socialization)」(Duranti, Ochs & Schieffelin 2012; Schieffelin & Ochs 1986 など)は、言語人類学的なアプローチであり、幼児、成人を含む新参加者が社会・教育機関、組織活動などに適切に参加できるようになるまでの過程を明らかにすることを目的としている。そのアプローチは、言語的能力や文化的知識などが比較的高い者というエキスパート(親、兄妹、保育士など)とそれらが比較的低い者というノヴィス(乳児・幼児、学生など)の相互行為に焦点を当てる。Schieffelin & Ochs (1986:163) は、言語社会化のプロセスは「(エキスパートが) 言語使用を通して社会化を実現させること “socialization through the use of language”」と「(ノヴィスが) 当該社会や場面に応じた(非言語行動も含めて) 言語を適切に使用すること “socialization to use language”」(筆者訳)という2つの点を主張している。すなわち、幼児などのノヴィスは、エキスパートとの相互行為によって、日常会話や組織活動における言語を適切に使用できるようになるのと同時に、社会的ルールや文化的要素も身につけるのである。Ochs (2002)や Silverstein (2003) は、言語要素(統語的規則、語彙、決まり文句など)は、指示的意味を持つだけでなく、アイデンティティ(ジェンダーや人種という社会言語学のカテゴリー「認知的態度 (epistemic stance)」及び会話における話し手と聞き手の役など)やスタンス「情緒的態度 (affective stance)」、などといった文化的要素(「非指示的意味 (non-referential meaning)」も包括すると説明している。

さらに、Ochs (2002) は、言語社会化のプロセスにおいて子どもがどのように「話し手」になるのかという課題を挙げている。このことに関して、社会学者の Goffman (1981)はフットイング論の中で「参与枠組み (participation framework)」を提唱し、その中で「話し手」と「聞き手」という2つの「参与地位 (participation status)」を分類した。特に Goffman は、発話に関する「産出フォーマット (production format)」を提唱し、ある発話に対して、話し手は「発声者 (animator)」(言葉を産出する・声を出して発音する者)、「作者 (author)」(その言葉を作成した行為者)、「主体 (principal)」(その言葉の内容を信仰して、信条

をもっている者) という3つの役割を細分化している(津田 2001: 60、串田 2006などを参考)。通常、現在の話者はそれら3つの役割が合わさった共同体であるが、その役割は分裂する場合がある。例えば、メディアにおいて、通常テレビのニュースキャスターや通訳者は主に発声体であるが、作者と主体ではないとみなされる。さらに、日常会話においても、Goodwin (2006) は、現在の話者が他人の言葉を引用する時に、現在の話者は発声者で、言葉を引用された者は主に作者と主体であると考えている。しかし、Goodwin は現在の話者は言語・非言語的要素(笑い声など)を使用して、引用された言葉に対して自らの感情的態度を示すことができると指摘している。

Goffman の産出フォーマットは、言語社会化についての研究においても使用されている。例えば、de León (1998, 2012) は、ツォツィル族²の複数人の会話において、親が乳児の喃語や非言語行動を通して乳児の意志を第3者に直接話法で言語化する場面を観察した。そのやりとりのなかで、親が発声者であり、乳児を作者という話し手の役割に位置づけ、「会話に埋め込まれた話者 (embedded speaker)」として扱っている現象を明らかにした。すなわち、言語社会化のプロセスにおいて子どもがどのように話し手になるのかという問い(Schieffelin & Ochs 1986) に対し、親が子どもとの相互行為において、子どもを話し手の役割に位置づけることを示した。

以上の知見を踏まえ、本研究では日本人親子3人の会話において親が謝罪表現を使用する場面で、子供をどのように話し手の役割に位置づけるのかを明らかにする。次節では、その分析に先立ち、本研究と関連する謝罪表現の先行研究をまとめる。

2.2. 謝罪表現

謝罪は、様々な語用論的・社会的な機能を果たすとても重要な発話行為であると考えられる。ここでは、謝罪とは「話し手が聞き手に対して何らかの危害を加えることに関わりを持ち、それを償うために行なわれる発話行為」(近藤 2009: 76-77) を指す。多くの社会において、話し手が自ら加えてしまう危害だけではなく、「誰かもしくは何か…に代わって謝罪することも起こり得る」(トマス 1995: 108)。謝罪という発話行為に、「直接謝罪 (explicit apology)」(“I’m sorry”, “I apologize”など)(Robinson 2004)は不可欠である。「ポライトネス理論 (politeness theory)」において、謝罪表現は人間関係を維持する上で極めて重要な言語的リソースであると指摘されている (Brown & Levinson 1987; Goffman 1971; Leech 1983)。Goffman (1971) は、ポジティブな自己像という「フェイス (face)」が相互行為において存在し、謝罪表現は、フェイスを管理する1つの「関係修復作業 (remedial strategy)」であると主張している。この Goffman のフェイス論に基づいて、Brown & Levinson (1987) は、人間には、相互行為において「他人に邪魔されたくない・踏み込ま

れたくない」(滝浦 2008:39)という「消極的フェイス (negative face)」と「他人に受け入れられたい・よく思われたい」(滝浦 2008:34)という「積極的フェイス (positive face)」という2つの欲望があると提唱している。特に消極的フェイスについて、話し手が聞き手に対して依頼や危害という「フェイス侵害行為 (face threatening act: FTA)」を行う前、または、行った後に、相手から邪魔されたくない・踏み込まれたくないという欲望を配慮するために「消極的ポライトネス・ストラテジー (negative politeness strategy)」を使用する。日本語においても謝罪表現がしばしば消極的ポライトネス・ストラテジーとして使用される。

謝罪表現は、その使用頻度、機能、会話の状況などが社会・言語によって異なる。例えば、雨天が多いイギリスでは、海外からの訪問客に天候について謝罪することがある(トマス 1995)。要するに、自分の責任でなくても、謝罪する場合がある。また、アメリカ・インディアン社会では、人に対してだけでなく、神や動植物などにも謝罪をする(Smith 2008)。日本社会では、謝罪表現を頻繁に使用する傾向がある(Sugimoto 2002)。日本語には多様な謝罪表現があり(「ごめんなさい」、「すみません」、「申し訳ありません」、「お詫び申し上げます」など)、どの表現を選ぶかは人間関係、会話の状況、心的な負担などによって異なる。また、「すみません」などは、謝罪だけではなく、感謝を表す他の発話行為として使用する場合がある(Coulmas 1981; Ide 1998)。

近年、日本語の謝罪表現に関する研究は増えてきているが、その多くは、成人会話(テレビ番組における会話も含め)(Ide 1998; Long 2010; 谷口 2010 など)のデータに基づいたものであり、親子の会話における謝罪表現の研究は非常に少ない(Burdelski 2013 など)。第一言語習得の研究を行なっている横山(1980)は、ある一人の女兒が10ヵ月から2歳11ヵ月になるまでの「あいさつことば」に着目し、2歳頃に「ごめんね」という謝罪表現を産出すると報告している。そして、それは「おはよう」、「ごちそうさま」、「おかえり」、「いただきます」、「こんにちは」、「バイバイ」、「いってきます」、「ありがとう」などの他のあいさつことばに比べ、少し遅く産出されることを指摘している。このことは、親が子どもに、これらのあいさつことばよりも、「ごめんなさい」や「ごめんね」を直接
プロンプトする
に促す頻度が低い(Burdelski 2009, 2012)ことを示唆している。

Burdelski(2009, 2012, 2013)は、親子間の会話において、親及び保育士は子どもが第3者(他の子ども)に、故意または不意に損害を与えた時、「ごめんなさい」や「ごめんね」を促すだけでなく、無生物や動植物といった有性物に対しても同様に、それらの謝罪表現を子どもに促すことを観察した。例えば、Burdelski(2009)では、2歳の幼児が地面に落ちている石を拾って口の中に入れると、母親が幼児に石を口から出すように指示する場面において、母親は幼児が自分の指示に従い、口の中に入れた石を取り出して強く地面に投げたのを見て、「そんなことしたらあかんわ」と発話した直後に、「あいたた言ったはるよ」

と石の気持ちを擬人化し、幼児に「石にごめんなさいってできる？」と促した例を説明している。この例は、母親が子供に、無生物に対しても謝罪をさせることがあり、それと同時に「思いやり」という文化的要素も育もうとしていることを示している。

会話分析において、会話の基本的な単位は「隣接ペア (adjacency pair)³」(挨拶-返答、依頼-承諾・拒否など) (Schegloff & Sacks 1973) であり、それは「第1部分 (first-pair part)」と「第2部分 (second-pair part)」から構成される。第1部分に対して、第2部分の応答には、「選好されている (preferred)」・「選好されていない (dispreferred)」(Pomerantz 1984; Sacks 1987 [1973])という2つの応答タイプがある。謝罪表現において多くの場合、承諾は選好されている応答とされ、拒否や沈黙などは選好されていない応答である。本研究では、謝罪表現の隣接ペアにも着目し、親がどのように幼児に選好されている返答を教えるのかについても検証する。

3. データと方法論

本研究では、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科にある養育者—子供間相互行為研究グループのコーパスを用いる。著者は当グループの協力者であり、自由なアクセス権を持つ。当該データは、京都在住の日本人家族 (17件)を対象に、家族と子どもの自然会話を屋内と屋外で収録したものである。データ収録および調査は、子どもが母親の胎内にいる時から開始し、誕生してから3歳頃まで一定の期間に亘り、2台のビデオカメラで撮影した。本研究では、その17件のうち、2家族のケース(「垂水」と「下鴨」)(調査対象児とそれらの兄妹の年齢は2~3歳である)においてみられた謝罪表現を取り上げ質的な分析を行なう。

4. 社会化ストラテジー

親が子どもに謝罪表現を、どのような場面で、またはどのように教えるのかという「社会化ストラテジー (socialization strategies)」(Duranti, Ochs & Schieffelin 2012)に着目し、それが言語社会化のプロセスにおいてどのような役割を果たすのかを探る。本データでは、親が子どもに用いる主な謝罪表現は「ごめんなさい」と「ごめんね」である。

ここでは、親が子どもにそれらの謝罪表現を教えるために用いる2つの重要なストラテジー「代弁」と「^{プロンプティング}促し」を検証する。

4. 1. 代弁

親子の会話における「代弁」(岡本 2001)とは、ことばが未発達の幼児に代わって、親が子どもの視点から発言する (de León 1998, Rabain-Jamin 1998 など) ことである。代弁とは「母親が子どもの行為や意図を言語化し、子どもの声で発話する」(岡本 2001: 46) ことである。日本では、親や保育士などが胎児・乳児・幼児の言葉を代弁することがよくみられる (Burdelski 2010, 2012; Kawashima 2013)。例えば、岡本 (2001) は、母子の会話において、母親が食べ物を口にしていないのに「おいしい」などと言う場面を観察している。また、Burdelski (2012) は、多人数会話において、親が第3者の子どもの非言語行動 (おもちゃを渡そうとすることなど) や最小限の発話 (「あー」など) を言語化し、直接話法を用いて (「どうぞって言ってるよ」など) 代弁する場面を報告している。さらに Clancy (1986) と Burdelski (2010, 2012) は、親が神や動植物などを擬人化し、それらの言葉を代弁することを観察している。

本データでは、1歳前後の幼児が兄姉になんらかの危害を加えた時、親が第3者である兄姉に「ごめんなさい」または「ごめんね」とその乳児や幼児の謝罪表現を代弁する言語行動がみられた。このような行動を通して、親が幼児に責任やモラリティなどを伝える。例1は、父親の膝の上に座っている10カ月の弟 (ハヤト) が、父親の横にある椅子に座り、ドールハウスで遊んでいる2歳10カ月の姉 (ユイ) の肩まで伸びた髪を右手で引っ張る場面である。(会話内で使用する記号について付録1を参照)。

例1 垂水 K080414_2⁴

- 1 弟: ((姉の髪の毛を捕まえ、引っ張る))
- 2 父: >あかん、あかん。< ((姉が少し痛そうな表情をする))
- 3 引っ張ったら、あかん(よ)。((弟の手を強く引く))
- 4 (0.5)
- 5 父: 痛かったやろ、ユイは。((姉の髪の毛を触る))
- 6 (0.2)
- 7 父: ごめんな(.)° ユイな°。
- 8 (1.1) ((姉が自分の髪の毛を触る))
- 9 父: 痛かった? ((弟の手をティッシュで拭き始める))
- 10 姉: °° 痛かった°° ((姉がドールハウスで遊び続ける))
- 11 父: 大丈夫?
- 12 姉: °° 大丈夫°° ((姉がドールハウスで遊ぶ))
- 13 父:→ ハヤトも「ごめんね:」言うてる。

- 14 (1.0) ((姉がドールハウスで遊ぶ))
15 父: 許してあげてね。
16 (1.4) ((姉がドールハウスで遊ぶ))
17 父: いい?
18 (1.5)
19 父: ん いい? ユイ。 ((父が姉の脇の下をくすぐる))
20 (1.0)
21 姉: へへ。 ((姉が父と弟に微笑む))
22 父: へへ。

例1の2行目では、1行目の弟が姉に取った行動(姉の髪を引っ張る)に対して、父親が弟の手を引きながら「>あかんあかん<引っ張ったらあかん(よ)」と注意しながら、他人の髪を引っ張ることはいけないことだとすることを弟に教えようとする。ここでは、父親が他人に身体的危害を加えてはならない、というモラル・スタンスを示している。そして、5行目で、父親は姉に「痛かったやろ」と言いながら姉の髪を触る。姉は父親の問いかけに答えず、ドールハウスで遊び続ける(6行目の沈黙)。7行目で父親は「ごめんな⁵⁾」と弟の代わりに謝ることで、弟の取った行動に対する責任を取る。親が自分の子どもに代わり子供の取った行動に対して責任を取るることについて、イギリス人女性と日本人女性の謝罪表現に関する調査を質問紙票により行った Okumura & Wei (2000)によると、日本人女性は自分の子どもが相手になんらかの危害を加えた時、子どもに代わって謝罪し、子どもの行動に責任を取る傾向があるという。この例でもそれと同様に、弟が姉に取った行動に関して父親が弟に代わり姉に謝ることで、弟の取った行動の親としての責任を示していると考えられる。

11行目まで、父親は謝罪表現や相手の身体状況の確認(「大丈夫?」)などを通して、Goffman(1981)の「作者」、「発声体」、「主体」という3つの話し手の役割を果たしている。しかし、13行目で父親はフッティングを変え、姉に「ハヤトもごめんね::言うてる」と直接話法で弟の言葉を代弁する。この謝罪表現において、父親は「発声者」であるが、弟を「責任者」として位置づける。さらに、15行目では父親は姉に「許してあげてね」と弟の行動を許容するように求める。その直後の姉の沈黙に対して17行目と19行目では「いい?」と姉に許容の確認を求めている。ここでは、言語社会化における謝罪表現の隣接ペアがみられる。すなわち、第1部分の代弁された「ごめんね」に対し、第2部分で父親は、姉に選好されている返答(この場合、承諾)を期待するが、姉の返答は選好されていない返答(この場合、沈黙)であった。そこで、父親は姉に「いい?」と確認をす

る。これは、姉から選好されている返答を引き出すための戦略である。父親は謝罪表現「ごめんね」に対する（選好されている）返答を姉に促すと同時に、姉弟間の調和を教えている。このことに対して、21 行目で、姉は一旦ドールハウスの遊びを中断し、父と弟に微笑みながら「へへ」とポジティブな態度を表す。この言動は、最終的に姉が弟の謝罪を受け入れたことを示していると思われる。そして、父親も姉と同様に「へへ」とポジティブな態度を表し、この会話のやりとりを終える。

4.2. ^{プロンプティング} 促 し

親子の会話における「^{プロンプティング} 促 し」とは、親が子供に言葉（語句や慣用句などを促すこと）である (Demuth 1986; Schieffelin 1990 など)。さらに、Ochs (1990)は、^{プロンプティング} 促 しとは「明示的に言葉の使い方を示す “socialization to use language”」と説明している。^{プロンプティング} 促 し行為は、それぞれの社会・言語において観察されるが、その使用頻度、プロンプトする表現、言語形式などは、社会や言語、子どもの年齢などによって異なる。

日本語の^{プロンプティング} 促 し行為に関する研究では、Burdelski (2009, 2012)などがある。Burdelski (2009)は、関西在住の1歳10ヶ月から2歳半の日本人の幼児7名(男児4名、女児3名)を対象に行った研究で、親が家庭の内と外で、1時間に平均8回程度子どもにプロンプトすることを観察した。親が幼児にプロンプトした表現を隣接ペアの観点から分析した結果、最もよくみられるプロンプト行為は「提供-お礼(「どうぞ-ありがとう」など)」であり、続いて依頼-承諾(「貸して-どうぞ」など)、あいさつ(「行ってきます-いつてらっしゃい」など)、謝罪-承諾(「ごめんね-いいよ」など)の順に多いことがわかった。さらに、Burdelski (2009: 238)は、^{プロンプティング} 促 し行為を以下の4種類に分類し、親はどの場面においても圧倒的に「誘導模倣」(95%以上)を行なう傾向があることを報告している。

- (1) 「誘導模倣 (elicited imitation)」 (例: 「ごめんねって」)
- (2) 「誘導質問 (leading question)」 (例: 「なんって言うの?」)
- (3) 「遂行指示 (performative directive)」 (例: 「謝りなさい」)
- (4) 「空きスロット (empty slot)」 (例: 母親: 「ごめんな?」 → 子ども: 「さい」)

^{プロンプティング} 促 し行為における誘導模倣とは、子どもに当該状況に応じた適切な表現を与え、その表現を繰り返すように促す (Hood & Schieffelin 1978)ことである。日本人親子3人の会話では、南太平洋のパプアニューギニアのカルリ族 (Schieffelin 1990)などと同様に、第三者(主に兄弟、近所の人など)に対して親が子供に与える表現を繰り返すようプロンプトすることが観察された (Burdelski 2009; 2012)。このことは、親が^{プロンプティング} 促 し行為を通して、子どもに自分と第三者との社会的関係を構築させようとしていることを示している。

本データでは、(2歳前から話し始めた)幼児が「第三者」(弟・妹、動植物)になんらかの危害を加えると、親がその幼児に「ごめんなさい」または「ごめんね」という謝罪表現をプロンプトする場面が観察された。このような場面を通して、親が子供に責任やアイデンティティなどを伝える。例1のように相手に身体的な危害を加える場面の他に、次の例2では、身重の母親(9ヶ月)と父親が、室内で3歳の兄(ショウタ)のプラレールで遊んでいる様子を見守っているところに突然兄が母に抱きつく場面を取り上げる。ここでは、兄が自分の製作した電車を胎児に説明しようとしないう「いじわる」な行動に対して親が兄に謝罪表現をプロンプトするやりとりを検証する。

例2 下鴨 Y 080113_2

- 1 兄: ((母に抱きついて、母の膝の上に座る))
- 2 母: ん::トンネルできたん。
- 3 (0.8)
- 4 兄: うん。
- 5 (1.0)
- 6 母: 赤ちゃん、[「でき」たよ]って[教えたげて。]
- 7 父: [()] [>おなか痛いやん。<]
- 8 (1.1)
- 9 兄: いや。 ((微笑みながら))
- 10 (0.3)
- 11 母: いやなん?
- 12 (0.3)
- 13 母: 赤ちゃんに教えたげてよ。
- 14 兄: いや。
- 15 母: 「これ電車よ、京阪よ」って教えたげて。 ((自分のおなかを指差す))
- 16 (1.9)
- 17 母: [ほな、ショウタ教えたげたら]、赤ちゃんも京阪好きになるかもよ。
[((自分のおなかを触る))]
- 18 (1.4)
- 19 母: そんないじわるしたら、京阪乗りたくなくなるかも。
- 20 (0.5)
- 21 母: どうする?
- 22 (2.1) ((兄が母の膝の上から立ち上がる))

- 23 母:→ 「ごめんね:」って。 ((自分のおなかを触る))
- 24 (0.6)
- 25 兄:→ ごめんね: :: :: ::。 ((母のおなかへ向ける))
- 26 (0.4)
- 27 母: 「一緒に京阪乗ろうね」って。 ((自分のおなかを指差す))
- 28 兄: 一緒に京阪乗ろうね。 ((母のおなかへ向ける))
- 29 母: 聞いてごらん。 =
- 30 母: =なんて言ってる? 赤ちゃん。 ((自分のおなかを触る))
- 31 兄: 「乗る」っ[て。
- 32 母: [うそー、ちゃんと耳当てて聞いてごらん。
- 33 母: ほんとに「乗る」って言ってる?
- 34 (2.3) ((兄が母のおなかに耳を当てる))
- 35 兄: ん。
- 36 (0.8)
- 37 母: 「いや」って?
- 38 (0.4)
- 39 兄: 「乗る」って。
- 40 母: ° ほんとに? °
- 41 兄: ((電車の方へ注意を向ける))

例2の6行目では、母親が「赤ちゃん、こんなのできたよ」と兄に兄の作ったプラレールを胎児に自慢するようプロンプトする。母親は、この発言において兄をその発話の発声者に位置づける。9行目で、兄は母親のプロンプトに対し、微笑みながら「いや」と拒否の返答をする。それに対して、15行目では、母親は「これ電車よ、京阪よって教えただけ」と兄に、胎児の興味を引くようにもう一度プロンプトする。17行目では、母親は「教えただけなら、赤ちゃんも京阪好きになるかもよ」と兄に胎児にプラレールの説明を行うよう促す。続いて19行目で「そんないじわるしたら、京阪乗りたくなくなるかも」と発話しながら、胎児が将来電車に対して抱くかも知れない印象に言及する。母親は、この一連のプロンプティングの促し行為を通して、兄に胎児(弟か妹)に対する思いやりを育くもうとしていると思われる。その後、兄の拒否の応答「いや」や沈黙に対し、母親は「ごめんね」と胎児にかける謝罪表現を兄にプロンプトする。この謝罪表現により、本来果たすべき兄としての社会的役割(ここでは、兄弟関係において兄が教えること)および責任を認知させようとする。

25 行目で母親のプロンプトした「ごめんね」に対して、兄は即座に自分の頭を母親のおなかの近くに寄せ、胎児に「ごめんね:::::」と繰り返す。ここでは、兄は終助詞「ね」の母音を伸ばしながら情緒的スタンスを表す。これに対し母親は「一緒に京阪乗ろうね」という勧誘表現(隣接ペアの第1部分)を胎児にかけるよう兄にプロンプトする。その後、兄がその発言を胎児に繰り返して述べる。母親は「なんて言ってる?赤ちゃん」と兄に尋ねることで、胎児を単なる「受け手」ではなく、「話し掛けられ、答えを期待されている受け手」(Goffman 1981; 森本 2008:230)として位置づけ、胎児の返答(隣接ペアの第2部分)を想像させる。31行目と37行目では、兄が「乗るって」と胎児のことば(隣接ペアの第2部分)を代弁する。このことは、4.1節(代弁)の考察から、3歳になった幼児が胎児のことばを代弁することによって、胎児の意志(ここでは、電車に乗ること)を想像し、創ることを示している。

最後に、親が謝罪表現の^{プロンプティング}促し行為を通して、子どもに生き物に対する思いやりや敬う気持ちを認知させようとする例を取り上げる。このような例を通して、親が子供に責任や思いやりなどを伝える。例3は、家族4人(例2と同様の家族)が公園を散歩している場面である。3歳7ヶ月の兄(ハヤト)は父親にボールを渡した後、一步後ろへ下がる。そこで路上にいるミミズを踏みつぶしてしまう。

例3 下鴨 Y080720_2

- 1 父: あ:: ミミズ踏んだ。
- 2 (0.3)
- 3 母: え?
- 4 (0.3)
- 5 父: ミ[ミズ踏んだ。] ((ミミズを指差す))
- 6 母: [いや: や]::::[::::::::::]::::: ((後ろへ振り向いて逃げる))
- 7 父: [h ふ:::ん h h]
- 8 (0.3)
- 9 父: .hhh hhhhh
- 10 (0.6)
- 11 兄: あ:っ hh
- 12 (2.0)
- 13 父: あ: 痛いって言ってるわ。 ((ミミズを指差す))
- 14 (2.0) ((父と兄はミミズから離れて、先に歩き進む))
- 15 父: あ:::::あ (1.4) ミミズ踏んじやった。

- 16 (2.0)
- 17 父:→ >ごめんなさい<って言ってきたら?
- 18 (0.4)
- 19 母:→ ん、ごめんね:って。
- 20 父: ええ?
- 21 兄: いいえ。
- 22 父: い[たい- (0.5) 痛いって言ってるよ。]
- 23 母: [()]
- 24 (0.6)
- 25 母: かわいそう[なミミズさん。]
- 26 父:→ [「ごめんねって言ったら](0.2) ミミズさん元気になるよ。
- 27 母: ()
- 28 (0.7)
- 29 母: (お水あげる人)
- 30 父:→ ここで言ったら? 「ごめんね」(って)。
- 31 (0.9)
- 32 母:→ ごめんねって(ミミズさん)。
- 33 父:→ ° ごめんね()°
- 34 (0.7)
- 35 父:→ 言っとけ。
- 36 (0.6)
- 37 父: ほら、今度ママの(あれ) () ((母が別のミミズを踏みつぶしそうになる))
- 38 母: いやや[(ほんとすごいでしょ)。]
- 39 父: [h h h] h h h

例3では、兄が不意にミミズを踏みつぶした行為に対し、1行目と5行目で父親はミミズを指差しながら「ミミズ踏んだ」と繰り返し指摘した後、微笑する(7行目と9行目)。13行目で、父親は、ミミズを擬人化し、「あ: 痛いって言ってるわ」とミミズの気持ちを代弁する。日本人親-子どもの会話における研究 (Burdelski 2009; Clancy 1986)では、親は、生き物の気持ちを代弁することによって、子どもに思いやりを育くませると報告している。それと同様に、父親は「あ: 痛いって言ってるわ」という発話を通して、兄にミミズの気持ちを考えさせようとする。15行目、父親は「あ:::~::~あ」から始まる「ミミズ

踏んじやった」という発話で「消極的な態度 (negative affect)」(Clancy 1999; Suzuki 1999 など) を示す。態度の言語社会化について、日本人母子の会話を研究した Suzuki (1999) は、子どもの行動において、例えば、相手に出された食べものを先に自分が取ってしまった時に、母親が「(なぜ) 自分で先取っちゃうの?」と「~ちゃう」を使用することで、消極的な態度を示すと報告している。本例では、「ミミズ踏んじやった」の前に間投詞「あ::::::あ」が産出されているが、その音調は最初の「あ」が伸ばされ、最後の「あ」が強調されている。すなわち、その間投詞を発話の冒頭に付加することにより、父親が兄の(不意に) ミミズを傷つけ、殺した行動に対する消極的な態度を明確に示し、ミミズが死んでしまい残念であるというネガティブ「評価 (assessment)」(Goodwin & Goodwin 1992; Pomerantz 1984)をしている。

その後、15 と 17 行目で、父親は兄が踏んだミミズに「ごめんなさい」を、母親は「ごめんね」と兄にプロンプトするが、兄は否定的な返答(「いいえ」)をする。その返答に対して、22 行目で父親は再び「いたいー (0.5) 痛いって言ってるよ」とミミズの気持ちを代弁する。25 行目で、母親は、兄に「かわいそうなミミズさん」とミミズに敬称「さん」をつけてことばをかける。続いて 26、30、32、33 と 35 行目で、兄にミミズに対して「ごめんね」をプロンプトする。ここでは、兄は「ごめんなさい」や「ごめんね」という謝罪表現をミミズに対して述べないが、親が謝罪表現の^{プロンプティング}促し行為を通して、幼児に生き物に対する思いやりや敬う気持ちを育くもうとしている態度が窺われる。

5. おわりに

本稿では、親子 3 人の会話において親が謝罪表現をどのような場面で、どのように使用し、教えるのか、そして謝罪表現は言語社会化の過程でどのような役割を果たすのかという問題を探ってみた。場面の異なる謝罪表現の分析から、親は子どもが第 3 者(姉、胎児、生き物)になんらかの危害を加えたとき、例えば、1 歳未満の幼児が姉の髪を引っ張る場面では、父親が「ごめんね」と幼児が発すると思われることばを代弁すること、3 歳の兄が母親のお腹の中にいる胎児に兄が作ったプラレールを見せない、偶然にミミズを踏み潰してしまう、など、子どもから危害を被った第 3 者に対して、「ごめんなさい」または「ごめんね」といった謝罪表現をプロンプトするといった、謝罪表現の「代弁」と^{プロンプティング}促しという 2 つのストラテジーを主に使用し、これらの 2 つのストラテジーを通して親が子どもの言動を責任者として位置づけていることが認められた。さらに本データでは、主に 1 歳未満の乳幼児の場合は、親が「代弁」を、2 歳以上の場合^{プロンプティング}は促し行為を使用することも観察された。そして、これらのストラテジーを子どもの年齢に応じて使い

分けることも明らかになった。すなわち、親は、子供との相互行為において、子供の言語・社会能力に適応した言語社会化のストラテジーを使いわけている。

以上の研究結果を踏まえ、今後の課題として、まず、子どもが「ごめんなさい」または「ごめんね」といった謝罪表現をどのような場面で自発的に述べるのか、さらに、「すみません」(Coulmas 1981)などの他の謝罪表現を何歳頃から、どのような場面でどのような機能を習得するのかに関する問題にも研究の視点を向ける必要があるだろう。特に子ども同士の会話 (Kampf & Blum-Kulka 2007)における謝罪表現を検証すべきであると考ええる。

そして、第一言語だけではなく、日本語を第二言語として習得する学習者にも着目し、彼らが日本語の謝罪表現を言語社会化のプロセスでどのように獲得していくのか、という問題にも関心を向けるべきであろう。本研究が日本語学習者の言語社会化の解明にも貢献することを期待する。

注

¹ 本稿で詳しく述べないが、聞き手について、Goffman (1981) は「話しかけられた者 (addressed hearer)」、「話しかけられていない参加者 (unaddressed hearer)」、「傍観者 (overhearer)」、「盗聴者 (eavesdropper)」などという様々なカテゴリーに分類した。

² ツォツィル族とは、メキシコのマヤ系先住民である。

³ 日本語による解説 (山田 1999 等) では、隣接ペアとは以下のような特徴がある。

- 1) 2つの発話順番から成る。
- 2) この2つの順番は隣接して配置される。
- 3) それぞれの順番が別々の話者によって実現される。
- 4) 2つの順番は第一部分と第2部分という順序付けがなされている。

第1部分は同じ連鎖タイプの第2部分を要請する。

⁴ K080414_2とは08年4月14日で撮影したものである。

⁵ 「ごめんな」では、関西弁にある終助詞の「な」を使用され、標準語の「ね」と同様に (Cook, 1992 など)、相手に同意や承諾などを求めるスタンス・マーカールであると考えられる。

付録1：会話データ内で使用する記号表 (田中、2004 に基づいている)

- 。 下降調のイントネーション
- ? 上昇調のイントネーション
- 、 平らなイントネーション
- > < この2つの記号で囲まれた発話の部分の速度が速いことを示す。
- ◦ この記号で囲まれた発話の音が周りより静かなとき
- : 音が伸ばされている状態を示す。一つの「:」は約0.1秒を示す。
- 音が途切れている箇所を示す。
- 下線 強調されている部分

- h 呼気音や笑いなど
- .h 吸気音
- [] 2人以上の参加者の発話の重なりを記す。
- = 発話と発話が途切れがなくつながっている箇所を記す。
- (0.2) 0.2秒から数えた沈黙の長さ
- (.) 0.2秒以下、非常に短い間合
- (()) 筆記者のコメントや参加者の非言語行動などを二重丸括弧の中に入れる。
- () 不可能または不確実な部分を囲む。
- 注目する現象が表れる行をさす。

参考文献

- 岡本依子 (2001) 「母子コミュニケーションにおける母親の代弁-1歳児への代弁の状況と発話形態の関連-」 『母子研究』 21, 46-55.
- 串田秀也 (2006) 『相互作用秩序と会話分析—「話し手」共成員性』をめぐる参加の組織化』 世界思想社.
- 近藤佐智子 (2009) 「中間言語語用論と英語教育」 『Sophia Junior College Faculty Journal』 29, 73-89.
- 田中博子 (2004) 「会話分析の方法と会話データの記述法」 山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』 (pp. 71-84). 有斐閣.
- 滝浦真人 (2012) 『ポライトネス入門』 研究社.
- 谷口龍子 (2010) 「詫びおよび感謝表現の選択と文・談話構造との関わり-日本語と中国語のヴォイスに注目して」 『東京外国語大学論集』 80, 179-198.
- 津田葵 (2001) 『コミュニケーションの日米比較』 大阪大学出版会.
- トマス, ジェニー (1995) 『語用論入門-話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』 田中典子訳. 研究社.
- 森本郁代 (2008) 「会話の中で相手の名前を呼ぶこと-名前による呼びかけからみた『文』単位の検討-」 児玉一宏・小山哲春編『言葉と認知のメカニズム-山梨正明教授還暦記念論文集』 (pp. 221-255). ひつじ書房.
- 山田富秋 (1999) 「会話分析を始めよう」 好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』 (pp. 1-35). 世界思想社.
- 横山正幸 (1980) 「幼児のあいさつことばの習得」 『福岡教育大学紀要』 30, 189-194.

- Blum-Kulka, S. & Olshtain, E. (1984). Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns. *Applied Linguistics* 5(3): 196-212.
- Brown, P. & Levinson, S. L. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Burdelski, M. (2009). Prompting Japanese children. In Y. Takubo, T. Kinuhata, S. Grzelak, & K. Nagai (eds.), *Japanese/Korean linguistics vol. 16*. Stanford, CA: CSLI Publications, pp. 235-249.
- Burdelski, M. (2010). Socializing politeness routines: Action, other-orientation, and embodiment in a Japanese preschool. *Journal of Pragmatics* 42: 1606-1621.
- Burdelski, M. (2012). Language socialization and politeness routines. In A. Duranti, E. Ochs, & B. B. Schieffelin (eds.), *The handbook of language socialization*. Malden, MA: Blackwell Publishing Ltd., pp. 275-295.
- Burdelski, M. (2013). "I'm sorry, flower": Socializing apology, relationships, and empathy in Japan. *Pragmatics and Society* 4(1): 54-81.
- Clancy, P. M. (1986). The acquisition of communicative style in Japanese. In B. B. Schieffelin & Elinor Ochs (eds.), *Language socialization across cultures*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 213-250.
- Clancy, P. M. (1999). The socialization of affect in Japanese mother-child conversation. *Journal of Pragmatics* 31(11): 1397-1421.
- Cook, H. M. (1992). Meanings of non-referential indexes: A case study of the Japanese sentence-final particle *ne*. *Text* 12: 507-539.
- Coulmas, F. (1981). Poison to your soul: Thanks and apologies contrastively Viewed. In F. Coulmas (ed.), *Conversational routine: Exploration in standardized communication Situations and Prepatterned Speech*. The Hague: Mouton de Gruyter, pp. 69-91.
- de León, L. (1998). The emergent participant: Interaction patterns in the socialization of Tzotzil (Mayan) infants. *Journal of Linguistic Anthropology* 8(2): 131-161.
- de León, L. (2012). Language socialization and multiparty participation frameworks. In A. Duranti, E. Ochs, & B. B. Schieffelin (eds.), *The handbook of language socialization*. Malden, MA: Wiley-Blackwell, pp. 81-111.
- Demuth, K. (1986). Prompting routines in the language socialization of Basotho children. In B. B. Schieffelin & E. Ochs (eds.), *Language socialization across cultures*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 51-79.

- Duranti, A., Ochs, E. & Schieffelin, B. B. (2012). *The handbook of language socialization*. Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- Ely, R., & Gleason, J. B. (2006). 'I'm sorry I said that': Apologies in young children's discourse. *Journal of Child Language* 33: 599-620.
- Goffman, E. (1971). *Relations in public: Microstudies of the public order*. New York: Harper and Row.
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Goodwin, C. (2006). Interactive footing. In E. Holt & R. Clift (eds.), *Reporting talk: Reported speech in interaction*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 16-46.
- Goodwin, C., & Goodwin, M. H. (1992). Assessments and the construction of context. In A. Duranti & C. Goodwin (eds.), *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 147-190.
- Holmes, J. (1990). Apologies in New Zealand English. *Language in Society* 19(2): 155-199.
- Hood, L., & Schieffelin, B. B. (1978). Elicited imitation in two cultural contexts. *Quarterly Newsletter of the Institute for Comparative Human Development* 2(1): 4-12.
- Ide, R. (1998). 'Sorry for your Kindness': Japanese interaction ritual in public discourse. *Journal of Pragmatics* 29(5): 509-529.
- Kampf, Z. & Blum-Kulka, S. (2007). Do children apologize to each other? Apology events in young Israeli peer discourse. *Journal of Politeness Research* 3: 11-37.
- Kawashima, M. 2013 (September). Relating with the 'unseen' as a family member. Paper presented at the International Pragmatics Association Conference, Delhi, India.
- Leech, G. N. (1983). *Principles of pragmatics*. London: Longman.
- Long, C. (2010). Apology in Japanese gratitude situations: The negotiation of interlocutor role-relations. *Journal of Pragmatics* 42(4): 1060-1075.
- Nureddeen, F. A. (2008). Cross cultural pragmatics: Apology strategies in Sudanese Arabic. *Journal of Pragmatics* 40(2): 279-306.
- Ochs, E. (1990). Indexicality and socialization. In J. W. Stigler, R. Shweder, & G. Herdt (eds.), *Cultural psychology: Essays on comparative human development*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 287-308.
- Ochs, E. (2002). Becoming a speaker of culture. In C. Kramsch (Ed.), *Language acquisition and language socialization: Ecological perspectives* (pp. 99-120). London: Continuum.

- Okumura, K. & Wei, L. (2000). The concept of self and apology strategies in two cultures. *Journal of Asian Pacific Communication* 10 (1): 1-24.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structure of social action: Studies in conversation analysis*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 57-101.
- Rabain-Jamin, J. (1998). Polyadic language socialization strategy: The case of toddlers in Senegal. *Discourse Processes* 26(1): 43-65.
- Robinson, J. D. (2004). The sequential organization of “explicit” apologies in naturally occurring English. *Research on Language and Social Interaction* 37(3): 291-330.
- Sacks, H. (1987 [1973]). On the preferences for agreement and contiguity in sequences of conversation. In G. Button & J. R. E. Lee (eds.), *Talk and social organization* (pp. 54-69). Clevedon, England: Multilingua Matters.
- Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica* 7: 289-327.
- Schieffelin, B. B. (1990). *The give and take of everyday life: Language socialization of Kaluli children*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schieffelin, B. B., & Ochs, E. (1986). Language socialization. *Annual Review of Anthropology* 15: 163-246.
- Silverstein, M. (2003). Indexical order and the dialectics of sociolinguistic life. *Language & Communication* 23: 193-229.
- Smith, N. (2008). *I was wrong: The meaning of apologies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sugimoto, N. (2002). Japaneseness manifested in apology styles. In Ray T. Donohue (ed.) *Exploring Japaneseness: On Japanese enactments of culture and consciousness*. Westport, CT: Ablex Publishing, pp. 357-367.
- Suzuki, R. (1999). Language socialization through morphology: The affective suffix –CHAU in Japanese. *Journal of Pragmatics* 31(11): 1423-1441.